

氏名： 小林 由香里 実施国：パラグアイ、パナマ 協力活動・調査研究

活動名称 パナマ共和国・ノベブグレ先住民族・女性組合員のエンパワーメント
～民芸品による収入向上プロジェクト～

実施期間 2013 年 9 月 1 日 ～ 2014 年 5 月 1 日

(1) 申請した動機

私はパナマ共和国で平成 21 年度 1 次隊の村落開発普及員として、パナマ国内最貧困地域とされるノベブグレ先住民自治区ニュルン市ブエノスアイレス地区にある民芸品の製作・販売を行うイレネ・バスケス協同組合で民芸品開発の活動を行った。当初は目玉商品等が存在せず、組合組織としての活動が成立していない状態で各々がさまざまな民芸品を製作していた。そこで本組合はひとつの作品に特化した「ナグアくまプロジェクト」を実施することになった。2011 年 3 月 11 日には一般社団法人・協力隊を育てる会の小さなハートプロジェクトを通して、188,000 円の寄付をいただき、私の帰国後も組合員でアイデアを出し合いながら活動を継続していた。そこで働いていた介入者(この場合、協力隊)の存在とはどのようなものであったのか、また、組合員の目指す先とは一体何であるのか聞き取り調査を行いたいと考えた。そしてパラグアイで行われた農村女性に対する生活改善プロジェクト(藤掛洋子 2008)の現場で聞き取り調査を行い、パナマでの調査を相対的に理論化する必要性を感じ本申請するに至った。

(2) 活動内容概要

パラグアイでは、1994 年 1 月から 1995 年 2 月まで青年海外協力隊によってある農村地域で生活改善プロジェクトが行われた。その際、農村住民の生活改善そのものが達成されるのみならず、これまでタブーとされてきた性と生殖に関する話題について考える女性が増え、家族計画を実施するために自分たちの空間を作り出したという調査・研究がある(2008: ibid)。それから約 20 年が経過した現在、そこに関った女性や農村の人たちがどういった生活をしているのかインタビュー調査を行った。

また、パナマでは対象地域にある協同組合に所属する組合員に、介入者(協力隊)が去ったあとの活動の変化についてアンケートとインタビューを実施した。また、今回はアンケートやインタビューはもちろんのこと、普段のなにげない会話からも貴重な情報を得ることができた。



右：ビーズのブレスレットを販売する女性

左：ブエノスアイレスの民族衣装ナグアを着せた人形

(3) 活動の成果・苦労した点・反省点等

パラグアイにおいては、初めて訪問した国であり、勝手が分からず困ることが多かった。そして気温の寒暖の差が激しく、体調を崩して何日か寝込んでしまうことがあった。また、ニャンドゥーティー（パラグアイ民芸品）生産者の自宅に宿泊で訪問しインタビューを行う予定であったが、雹が降るといふ異常気象に見舞われ実現に至らなかった。

パナマにおいては、2年間生活をした地なので、現地の友人や元職場の同僚などの協力を得て非常に有意義な時間を過ごせた。元職場（IPAC00P:協同組合庁）の協力は大きく、サンティアゴ市（対象地域から最寄の大きな都市）から車を2時間ほど走らせてくれるなど本当に助けられた（寝袋や食糧など生活に必要な物資を運ばなければならなかったため）。実際の調査では電話等の連絡手段がないために、話を聞きたい対象者になかなか会うことができず計画通りに進まなかった。アンケートも人伝いに渡すほかなく、アンケートの意図がきちんと対象者に伝わっているのどうか不安があった。

両国においての反省点としては、せっかくフィールドにいるのだから…。と聞きたいこと・調査したいことに対して欲が出てしまい、本来調査したいことと少しズレが生じてしまった部分がある。しかし、そこで得た情報もとても貴重なものなので、今後論文を執筆していく中で大切に分析していきたい。

(4) 今後のプラン

今回、ノベブグレ先住民族の女性から貴重なライフヒストリーを聞くことができた。これは本来計画には入れていなかったが、これまで一緒に活動してきた女性たちが悲しい過去を背負っていたり、現在とても苦しい生活（1日3食摂れないなど）をしていたり、以前には聞くことがなかった話を聞いていくうちに、その女性たちの語りをもっと深く分析していきたいと考えるようになった。様々なバックグラウンドを抱える組合員やそのコミュニティーに住む人たち。そこに関わる民芸品活動や開発とはどのような位置づけとなるのであろうか。今回得たデータをもとにこれから本格的に修士論文の執筆が始まる。文章能力もデータの理論的な枠組みでの分析力も未熟ではあるが、精一杯頑張りたい。